



てんぐウキ
の選び方



てんぐウキの選び方●目次

■はじめに	1
■てんぐウキの選び方	2
1. 磯の環境とウキサイズ	2
2. サイズと流れの速さ	3
3. 番号の使い分け～流れと反応	3
4. 微少な力	3
■番号と反応	4
1. φ(ファイ)番	4
2. 0～12番	6
■コラム	
二枚潮・湧き返し・激流	5
磯際釣り	11
縦方向へのとまどい	13

はじめに

磯に立つと風、磯の前の流れ、海中の水温、そして、海面から魚までの距離。どれも自由にならないものばかりが相手になります。それなのに、簡単なときは、とても簡単に釣れますが、何がどうなったのか、むずかしさばかりが身に凍みる釣りになることも、たびたびあります。

魚達は、遅くて弱い流れでも積極的に使い、早く強い流れも巧妙に利用しています。釣り人は、流れの中は釣れる確率が高いことを、経験則で知っています。しかし、ウキを流すには我慢しきれない遅くて弱々しい流れは、流れが無い、という判定で使わず、激流の中の釣りはテコに合わない、とあきらめてしまう方が多いようです。

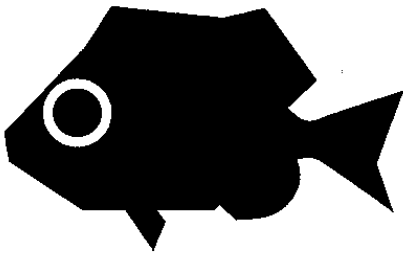
こうして、魚達が利用する流れの範囲と、釣りで利用している流れの範囲を突き合わせてみると、その差がはっきりとわかります。遅すぎるといって捨ててしまったり、速すぎるからといってあきらめてしまう流れを上手に利用するには、ウキに頼らなければなりません。遅くて弱い流れにも敏感に反応し、激流の中を安定してタナを探り続ける、そんなウキが必要です。てんぐウキの、あの独特なフォルムは、利用できる流れの範囲を確実に広げるための必要性が、感度になり形となったものです。ウキは水面に浮いているものと、固定した考え方をすれば、海中に浮かせて、海中の流れに反応させて使うてんぐウキは、とても変わった道具かも知れません。しかし、すべての釣具が完全に発達しきった訳ではありませんから、固定的な判断をするのは誤りです。

ウキが水面に浮き続けているのが長所にもなれば、ウキが水面に浮き続けるために短所となることもあります。

ウキが海中に入ってしまうのが難点となれば、海中の流れの中を直接釣れるという、大きな利点になります。

釣りの考え方の中には、多くの無理や、無意味な複雑さを重視する傾向がある反面、釣り方という実用面では、楽な釣り方で常により結果が得られることが強調されます。そんな考え方で釣り方を組み合わせた釣りも楽しいとは思いますが、最大の努力で、思いきり釣りをするのも、すがすがしくて楽しいと思います。

てんぐウキの選び方、上手な使い方について、使用例をあげて、できるだけわかりやすく説明しました。是非、てんぐウキを使いこなして、満足する釣りをお楽しみ下さい。



てんぐウキの選び方

磯釣りを習いたての頃は、風の中の釣りは、ロッドが振りきれないばかりか、仕掛けを回収するのさえ自由にはならないものです。それがいつの頃からか、磯釣りに風は付きものと慣れてしまいます。

風に慣れてしまうのか、あきらめるのか、意外と風対策が甘いようです。風の中とはいえ、思うように、思う所へ、仕掛けが振り込めない釣りくらい不自由なことはありません。小さいウキは、向かい風や横風を受ければ、ウキもラインも吹き流されてしまい、釣りにならないのが磯の上の現実です。風の強さとミスマッチなウキを使い続けるのは、ローテーションするウキの用意がないからでしょうか。そこで、地方地域の磯の環境からウキサイズを決めました。

1. 磯の環境とウキサイズ

磯の環境は地方地域によって、それぞれに違います。そこで、地方地域の地形の特色で風の強さに適応するウキサイズを考えます。湾口が狭く、周囲の海岸線のすぐ後ろが、高い山並みで囲まれている地方地域の磯は、年間を通してどの方位の風も受けにくいので、風に悩まされる釣りも少ないでしょう。

ウキサイズはφ32、φ30、φ28を中心に、風の強いときはφ36かφ34が使いやすく、磯際用としてφ24が必要です。

湾口が広く、周囲の海岸線から山並みが離れているような地方地域の磯は、年間を通して風に悩まされることも多くなります。

ウキサイズはφ36、φ34、φ32を中心に、風の弱いときはφ32、φ30、φ28が使いよく、強風の中ではφ40をセットし、磯際用にφ24を用意します。

湾口付近や外洋に面した地方地域の磯は、どの方位の風も受けやすく強く、風の中の釣りの方が多いと思います。

ウキサイズはφ40、φ36、φ34などが中心となり、風の弱いときはφ34、φ32、φ28などが使いやすく、磯際専用としてφ24を用意します。

外洋の離島や外洋に点在する磯は、風と流れの両方を考慮しなければなりません。

ウキサイズはφ44、φ40、φ36が中心となり、風が弱く流れが遅いときはφ36、φ34、φ32、φ30が使いやすく、磯際専用としてφ28、φ24を用意します。

このように、地方地域によって磯の環境は大きく違うので、使用するウキサイズも当然違ってきます。他の地方地域へ遠征すると、海は見なれているのに、磯にも慣れているはずが、何かが違っていてどうしたのだろうと、ちょっと不安で不思議な思いがするのは、磯の環境の違いからくるものです。風の中で、なんとなく使いづらいたら、ふんぎりよくサイズローテーションをして下さい。

ウキサイズ (外径表示)	ウキ番号												
	φ 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
φ24	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
φ28	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
φ30	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
φ32	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
φ34	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
φ36	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
φ40	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
φ44	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
φ28 INNER													

2. サイズと流れの速さ

流れそのものや、流れの速さを実感するのは、ウキを流したときです。ウキを流しながら、速い・丁度いい・遅い・流れが無いなどと大まかな、流れの速さが判定されます。同じ流れを釣っても、流れの速さの判定は、個々の印象によって違います。

また、Aという地方地域の磯で、速いといわれる流速と、Bという地方地域で速いといわれている流速が、同じ流速とは限りません。流速を正確に判断することは釣りでは求められていませんが、同じ流れを釣りがながら、流れをハッキリ実感しながら釣りをすると、流れを実感できないまま釣りをしているのでは、利用できる流れの範囲を広くとれるか、狭くするかの分かれ道になるだけに問題です。ウキの流し方の技術差もありますが、使用しているウキサイズに原因がある場合の方が多いようです。ウキサイズのローテーションをして、流れの速さとバランスするウキサイズを見つけて、釣りやすい状況をつくり出すようにして下さい。

3. 番号の使い分け～流れと反応

てんぐウキは、沈むウキでも、強制的に沈ませて使うウキでもありません。海中の流れに反応させて、海中を直接釣るウキです。流れの中で、どんな反応を起すか基本的な説明をしておきます。

ウキが海面に着水すると、流れを受けてウキが押し流され始め、同時に、海底方向へと送り込まれて行きます。何故、そんな反応や動きをするのかということは、釣りとは違う分野になりますから省略します。流れが速くて強ければ、ウキが海中に送り込まれる速度も早く、深く送り込まれて行きます。流れが遅くて弱ければ、海中に送り込まれる速度も遅くなり、海底方向に送り込まれる距離も浅くなります。ウキ番号についても同じことが言えます。3番より2番の方が、2番より1番の方が、1番より0番の方が、より深く海中に送り込まれて行き、数字の小さい方が、遅くて弱い流れに反応しやすく設定されています。

ウキが着水します。ラインに波や流れや、海面に吹きつける風によって、糸ふけが出き、ウキが流れるにつれて、糸ふけが成長し、成長する糸ふけによってラインに微妙な抵抗力が発生します。ラインに発生した微少の抵抗力が、ウキの動きや反応を鈍らせたり助けたり、マイナス効果とプラス効果になります。

4. 微少な力

微少な抵抗力というのは、一体どの位の力なのでしょう。ピーンと張った一号のハリスで、絹ごし豆腐を半分には切るには、大きな力を必要とします。できたての柔らかなマシュマロの表面に凹みが出きないようにそーっと摘む指先に感じるか、感じないかの、かすかな抵抗力とラインに発生する微少な抵抗力とが同じ位です。例えば、ラインオペレーションで、糸ふけを回収しながら、ラインの位置をできるだけ真っ直ぐに修正しようとして、流れ行くウキを一時的に止めてしまったり、流れに反応しているウキの動きを一瞬にしても止めてしまうのは、微少な力以上に大きな力がウキに加わったためです。ラフなラインオペレーションを繰り返すと、流れからウキがズレてしまい釣りミスになります。微少な抵抗力を感覚的にでも理解していると、色々役に立ちます。

番号と反応

てんぐウキの番号は、ウキの感度を数字にしました。小さい数字ほど高感度となります。φ (ファイ) から12番までをいくつかのグループに分けて説明します。

1. φ (ファイ) 番

φ 番号は、てんぐウキの中で唯一ウキ自体が沈むように設定してあります。特殊な流れ用のウキと考えて下さい。

【使用例 1】

海面部分の流れと、海中の流れにズレがあるとき、二枚潮と呼んでいます。流れのズレが三段になっていけば三枚潮といいます。二枚潮・三枚潮のときに魚が海面部分の流れの中に浮上してきて、コマセを拾う場面を、まだ見たことはありません。二枚潮なら二段目の流れを、三枚潮なら三段目の流れの中を釣ることになります。

流れのズレが何段あろうと、ハリスに重いオモリを打って、付エサを沈めてしまえば釣りになる。考え方としては正解のようですが、実際にやってみると、考えたようには行きません。水面に浮き続けるウキは、海面部分の流れ方向通りに流されてしまい、付エサは何段目かの流れ方向に流されるので、海面のウキと、付エサが綱引き状態となりますから、ズレを克服することはできません。

この釣りでは、海面にウキが浮き続けることがブレーキになります。それなら、ウキも付エサも、仕掛けごと海中に送り込んでしまえば、釣りが成立する可能性は高くなります。二枚潮・三枚潮の釣りには φ 44 ~ φ 24 の φ 番号を効果的に使って下さい。φ 番号に限らず、どの番号にも共通した使用上の留意点があります。海面に着水したウキが、石を落としたかのように海底に向かって沈んで行くような場合は、セットしているウキサイズより、小さいウキサイズにローテーションして下さい。

【使用例 2】

湧き返しとか、鏡などと呼ばれるのは、方向の違う二つの流れがぶつかり合って起る現象です。二つの流れが、それぞれに持っている流速と力(圧力)によって、湧き返しの規模が違いますが、湧き返しの中へ直接仕掛けを投入しても、仕掛けは海中になじまず釣りにはなりません。ならば、重いオモリをハリスに打って沈ませてやる。と考えるでしょうが、二枚潮のときと同じで、効果はありません。湧き返し部分のポイントの予想は不可能ですし、湧き返している位置と釣り座の関係から、仕掛けが流れる道筋は決ってしまいます。湧き返しの周辺を釣るときは、φ 番号をセットして、湧き返している所より手前に仕掛けを振り込み、湧き返し以外の流れの中で、仕掛けが海中となじむ時間をたっぷりと取ります。ウキから付エサまでの仕掛け全体を海底付近まで送り込み、タナを海底方向から海面に向けて探って行きます。ウキが海底付近まで送り込まれて行かない時は、セットしてあるウキサイズより、大きなウキサイズにローテーションして下さい。

【使用例 3】

離島や外洋に点在する磯で、海面が掘れ返っていて、見るからに激流とわかる流れの中を釣るときは φ

番号が必要です。

てんぐウキを使わなくても、ハリスに多段にオモリを打って、付エサを強制的に沈めれば釣りになるだろう。誰もが考えつく方法ですが、実際にやってみると、ハリスに打った多段オモリが木の葉のように流れに押し流されて行き釣りにはなりません。激流にもピンからキリがありますが、ピンの激流を釣るときはφ44かφ40のφ番号をセットします。

激流と釣り座が直角の関係になるのは、流路が磯から離れている場合です。仕掛けを振り込む位置は、釣り座より上流方向の激流の一番外側の流れの淵、つまり、流れがゆるやかな部分です。上流方向に仕掛けを着水させ、激流に吸い寄せられている別の流れがあるかのような錯覚が起る激流の流れの淵で、ウキを海中になじませながら、釣り座の前あたりで激流の中に仕掛けを送り込みますと、糸ふけ量を最小限に押さえられ、ウキが激流に入ったとき、ラインの送り出しが、流れのリズムに合わせやすくなります。

激流と釣り座が平行になる場合は、流路が磯際を通っています。当然ロット全体を流れの方向と平行に構えますから、仕掛けの投入も違います。付エサを上流方向に落とし、ウキは下流方向に入れます。もちろん、磯際ギリギリに落とします。足元から仕掛けを入れるため、糸ふけ量がほとんどないので、着水したウキに、ラインの張りによる抵抗力が働いて、海中に送り込まれにくくなります。一方付エサは上流方向に入れないと、激流に押し上げられたまま、流れ出してしまいます。仕掛け全体を海中になじませることができません。そこで、ウキがラインの張りで、海中に送り込まれにくくなるロスタイムを、付エサを上流方向に落して、時計の振り子のように、上流から下流に流される時間でホローします。こうすると、仕掛け全体がスムーズに海中になじませられます。仕掛けのなじむ時間は、ハリスの長さにより違いますから、その事を念頭に置いて、付エサを落す位置を考えて下さい。そして、流れのリズムとラインの送り出しを合わせる努力をして下さい。φ番号の釣りは、仕掛け全体を一度海底付近まで送り込んで、海底から海面方向にタナを探って行きます。従って、ラインの送り出しを止めたりすると、ウキは一気に海面に浮上して釣りミスになります。スプール内でラインが、かみ合っていないか常に気配りして下さい。

激流のピンからキリの、キリの場合は、かなり速い流れも含まれます。使用するてんぐウキはφ40～φ36のφ～8番で、海面から海底方向にタナを探り、流路と釣り座の関係は前例通りですが、仕掛けは流れの中に直接振り込み、ラインオペレーションは前例通りです。φ～2番くらいの番号は、使いなれないうちは、ウキの送り込み量より、ラインの送り出し量の方が多くなる傾向が見受けられ、特にφ番号は海底に着床することもあり、また、多量に送り出したラインが、流れに押し込まれて海底や海藻に引っかかってしまう事があります。ラインの送り出し量の加減を忠実に行って下さい。

二枚潮・湧き返し・激流

二枚潮・湧き返し・激流のピンからキリ、これらは特殊かも知れませんが、だからといって嫌ってみても、流れという自由にならないものを相手に釣りをしているのですから慣れるしかありません。ラインの位置を置き替え、ラインを釣り座からウキまで真っ直ぐになるように修正するときなどに、リールスプールでラインを回収する、つまり、リールを使う動作が入るとラインオペレーション(道糸を操作すること)、ロットだけでラインの位置を置き替えたり修正したり、ウキを流れに反応させるためにラインを微妙な力で張ったりするのはラインメンディング(釣りやすいように道糸を管理すること)といえます。

これらは、言葉や文字で伝えられるものではなく、説明されて覚えられるものでもなく、実際に磯の上で、ラインオペレーション・ラインメンディング・ウキローテーションを意識しながら経験を重ねる中で、知らず知らずのうちに、手についてくる高度な技術ですから、焦らずあきずに根気よく続けて下さい。

2. 0～12番

■流れの基本

【流れの質】

0～12番の使用例より、先に地方地域によって流れの質が違うということを理解してもらいながら、簡単な番号の使い分けを説明した方がわかりやすくなると思います。

外洋の離島や外洋に点在する磯では、黒潮の流れを直接釣る機会が多くなります。流速は平均最大で2～3ノットですから、秒速にすると1～1.5mくらいの流れになります。この流速ですと、すべてのウキサイズのウキ番号0～10番なら海中に送り込まれてしまいます。もちろん、ウキサイズとウキ番号によって、送り込まれる深さが違い、ウキサイズが大きくて番号の小さいほうが深い水深へと入って行きます。黒潮の流路が離れてしまっても、無名の海流の流れがあります。流れの長さは短いもので2～3kmで消滅する流れもあれば、8～10kmで消滅する流れもあります。この無名の海流の中でもすべてのウキサイズ0～10番は海中に送り込まれて行きます。無名の海流がいつも釣りに都合よく発生したり、磯から利用できる所に流路が出現するとは限りません。無名の海流が使えなくても、潮流の流れが利用できます。大潮のときの平均最大流速は、秒速0.5mくらいです。この流速ですと、すべてのウキサイズの0～6番が海中に送り込まれます。このように外洋の磯では、質の違う流れを単独で利用する釣りもあれば、黒潮と潮流の流れが加算された複合の流れの中で釣ることもあります。

湾口付近や外洋に面した磯では、潮流の中の釣りになります。流速の平均最大は、秒速0.5～0.3mくらいです。この流速になるとすべてのウキサイズの0～4番くらいが海中に送り込まれていきます。黒潮分流入が加算されると0～6番が海中に送り込まれます。

湾奥から湾奥にかけての磯は、潮流の影響も少なくなり、残差流という穏やかな流れの中の釣りとなり、流速も平均最大で0.3～0.2m位になります。これだけ、ゆるやかな流れになるとすべてのウキサイズの0～3番が海中に送り込まれます。

日本海側の磯では、ほとんど潮流の流れは期待できず、沿岸境界流と呼ばれる対馬暖流、津軽暖流の流れの中を釣りますが、対馬暖流で平均最大流速が1ノットですから、磯で利用している流れは、秒速0.3～0.2m位です。この流れの中ですべてのウキサイズの0～3番が海中に送り込まれます。

黒潮・無名の海流・潮流・残差流・沿岸境界流と、流れにつけられた名前が違うように、流れの質も違います。磯の上で、流れの名前を頼りに釣りはしませんが、名前のついた流れがもっている平均最大流速が違います。流れの速さにたいする感覚が、地方地域によって同じとは限らないという理由は、ここにあったのです。利用している流れの質に慣れてしまうと、他の地方地域の磯に立つと、いつもと違った、釣りやすさ・釣りにくさを覚えるのは、磯の環境と流れの質の違いによるものだけだということも、これで理解してもらえたと思います。

大きく地方地域に分割すると、その地方地域内の特色ある磯の条件までが平均化されてしまい、といって、特色のある磯の条件を中心に説明をすると、そうでない磯の条件の誤解へとつながってしまいます。釣りの説明に、このような思わぬ困難さがあるだけに、説明を提供される側にとっては、理解しにくい、納得しがたい所があると思います。全国に無数にある磯を一つ一つとりあげることは不可能なことなので、流れに反応するウキサイズとウキ番号の使い分けは、あくまでも目安になります。説明されているウキサイズとウキ番号を使っても、流れが実感できないとか、釣りにくいと感じたら理由を考えるより、ふんざりよく別のウキサイズ・ウキ番号にローテーションをして、流れとバランスがとれたらウキをセットするように最大の努力をして下さい。

【水平方向の流れ】

磯の環境・流れの質と合わせて、流れの方向についても十分に理解していただきたいと思います。特に、流れの方向を常に意識をして釣りをしていると、今までの釣りの中で不鮮明だった部分がなんとなく見えてもきますし、それよりなにより、釣りそのものが広がってきます。

流れの方向といっても、東西南北の方位ではありません。名前のついている流れに共通するのは、海面に流れの一面を出して、水平方向(横方向の流れ)に流れて行く点です。この水平方向の流れは、流れの主軸というか、流れの本体は海面付近にあります。水平方向の流れを使うときは、水面に浮き続けるウキで、仕掛けを流して行く釣り方が適しています。水面に浮いているウキから、付エサをぶる吊げて、付エサを一定の水深に保っておくために、ハリスにオモリを打って、ウキとオモリの間をピーンと張ります。付エサを食わせる確率を高めるには、ウキから付エサまでのウキ下を、魚が行動している水深に一致させなければならないのですが、肝心の魚が行動している水深が、どこなのか、まったくわかりません。そこで、これまでの経験によって、季節ごとに違い、日毎に違い、天候によっても違い、時間の経過によっても違ってしまふ、魚のタナを予想して、仮のウキ下を決めます。経験による予想と偶然からウキ下とタナが一致すれば、水平方向の流れの釣りが成立する確率は高くなります。水平方向の流れに、水面に浮いているウキを流すのは、わりと簡単に覚えられますが、遅くて弱い流れの中にウキを流して行くとなると、また別です。釣りで、利用している最低の流速がどの位なのか検討してみます。流れの速さが秒速4cm位とすると、1分間で $4\text{cm} \times 60\text{秒} = 2.4\text{m}$ 、10分間仕掛けを流すと、 $2.4\text{m} \times 10\text{分} = 24\text{m}$ ですが、流れの速度よりウキの流れの方が遅いので、約20%遅くなると仮定しますと、10分間で約20mの距離を流れます。仕掛けを振り込む、20mウキを流すのに10分間、そして回収という時間を計算すると、1時間のうちに仕掛けを振り込む回数は、4回位が限度ですから、8時間釣りをしても、振り込み回数は30~40回にしかありません。これでは、流れていない・流れがない、と判断したくなるでしょう。

秒速8cm位の流れになると、1分間で $8\text{cm} \times 60\text{秒} = 4.8\text{m}$ ですが、20%減として、約4mですから10分間仕掛けを流せば $4\text{m} \times 10\text{分} = 40\text{m}$ くらいの距離になります。

水平方向に仕掛けを流して行く釣りは、当たりがあつてポイントを知るまでは、いかに短時間で、より長い距離を流せるかにかかっています。それにしても、10分間で35~40mほどウキが流せれば、振り込みによる飛距離かせぎもできるので、遅くて弱い流れとして、釣りでガマンできる流れの限界といえるでしょう。遅くて弱い流れ、ゆるやかな流れの中でラインを張ってウキを流すと、ウキの流れはさらに遅くなり、流れていない、という錯覚が起こりかねないし、釣りにくい釣りを演出することにもなりますから無意味な張りに注意して下さい。

【魚との距離】

水平方向の流れを利用して釣りをする場合、ウキ下をタナに一致させないと、当たりの合図が出ないので、どのあたりがポイントになるかもわかりません。そこで、魚との距離についてもハッキリしておかなければなりません。

上物とか青物と呼ばれる魚達の活動の場は海面付近です。それ以外の魚達の活動の場は、水深の浅い深いにかかわらず海底付近ですから、魚までの距離は、磯まわりの総水深と同じということがわかります。

磯まわりの平均水深が4~5mなら、海面から魚までの距離は4~5mで、縦方向に釣ります。

磯まわりの平均水深が8~10mなら、海面から魚までの距離は8~10mで、縦方向に釣りをします。魚までの距離と、釣る方向がわかりました。

水平方向に仕掛けを流して行く距離と比べて、海面から海底までの縦方向の距離の方が、ずっと短距離ですから、釣りやすいことに気づきます。ウキは水面に浮いていて、そのウキからウキ下を決め、付エサの水深を一定に保つために、ハリスにオモリを打ってある仕掛けで、どうやっても海底付近を釣り続けることはできません。ここが水平方向と縦方向の釣り方のターニングポイントになります。

【縦方向の流れ】

海面に流れがあるように、海中には海中の流れがあります。海中で生まれて、流れの面を海面には出さずに、海中で消滅します。海中の流れは、磯のまわりの至る所に存在します。海中の流れも流路は移動するし、生まれたり、消滅したりするからには、時間という寿命が有るということになりますから、探りあてた海中の流れが、一日中利用できるとは限りません。流路が移動したり、消滅したら別の海中の流れを探して下さい。

海中の流れには名前が付いていません。流れの方向で呼ばれていて、海面から海底方向、あるいは、海底から海面方向への、縦方向の流れを対流といいます。黒潮・無名の海流・潮流・残差流・沿岸境界流などの流れの底から分岐して対流となったり、風によって発生するスリック(筋目といわれ海面に泡やゴミが線状に集まる部分)も対流を起こしています。

この対流に、ウキから付エサまでを一緒に送り込んで行けば、ウキ下を決める必要もなく、確実に付エサは海底付近に届けられます。つまり、魚の口元へエサを届ける可能性は非常に高くなります。

水平方向の流れの速さを検討したように、対流の速さについて考えてみます。

海面から海底方向に、秒速2cmで流れていれば、付エサは1分間に $2\text{cm} \times 60\text{秒} = 1.2\text{m}$ ずつ、海底に近づいて行きます。ウキから付エサまでの全体が海底方向に流れて送り込まれて行きますから、ウキ下を決める必要がまったくありません。

磯まわりの平均水深を8~10mと仮定しても、6~7分間で海底付近に付エサは届けられます。秒速8cmの水平方向の流れで、35~40mの距離、仕掛けを流すために10分間が待てるのですから、6~7分間なら十分に我慢できる流れの速さです。縦方向の流れを利用することで、利用できる流れの範囲は、ぐっと広がります。

【海底の横方向の流れ】

てんぐウキを使って、利用できる流れがもう一つあります。

海底付近を水平(横方向)に対流する流れです。魚の行動の場である海底付近の流れの中を直接釣るので、これほど魚との距離が近い流れはありません。海底付近の流れの遅さは、秒速2cm~5cmと、ガマンの限界ぐらいに遅いようです。横方向の流れに仕掛けを流すと、流す距離に対する不安がつきまとってきます。何十メートル位流せばいいのか、何分間位流しているのか、という不安感がでるのも、付エサがとられているのではないかという心配をするから、流す距離や時間の目安が欲しくなるのでしょう。海底付近の横方向の流れが遅すぎても、なんとか我慢ができるのは、魚が活動している場の流れを釣っている、という現実感があるからです。ラインの出も、パラッ・・・パラッ・・・と、釣りをしているのを忘れかけた頃にラインが出て行くという、のんびりとしたリズムです。ウキが見えないだけに、ラインの出に全神経が集中するので、この遅さに意外と耐えられます。これで、釣りで利用する流れの方向はすべてです。

※まとめ

海面を流れる水平方向

海面から海底に向う縦方向

海底を流れる横方向

どの流れ方向を使って釣りをするかで、サイズとウキ番号が違います。

0～3番

水平方向・縦方向・横方向の、遅い流れに反応しますから、むやみにラインを張ってしまいますと、ラインの抵抗力でウキが流れの筋からズレてしまったり、海中に送り込まれつつあったウキが上昇してきてしまったり、反応が止まってしまったりします。特に遅い流れでの釣りは、どの方向の流れを利用していても、ラインオペレーションテクニックが明暗を分けますので、ラインの扱いには十分な気配りをして下さい。

外洋の離島や外洋に点在する磯では、すべてのサイズの0～3番が使えます。湾口付近や外洋に面した磯ではφ40～φ24の0～3番が適しています。

湾中央から湾奥の磯にはφ36～φ24の0～3番が扱いやすいです。日本海側の磯にはφ34～φ24の0～3番が利用しやすいです。

【使用例4】

波やウネリの大きさと、磯の傾斜や形状によって、サラシの大きさ、長さ、強さが異なりますが、釣るのは縦方向です。磯に当たった波やウネリが、海中に差し込むようにハネ返って行きますから、コマセも海中で広く散らばります。サラシ場は海水の混合が激しく起るので、水温の変化もめまぐるしく、磯の上からサラシを見て、使えるか、使えないかの判定はできません。従って、釣って確かめるのですが、こだわりすぎないように注意して下さい。

前例の地方地域のサイズを参考にして、番号は0～3番、サラシが強いときは、4～5番で縦方向を意識して釣って下さい。

また、サラシが長く伸びて、沖の流れ(水平方向)と時々合流しているように見える場合サラシの元から仕掛けを流すのではなく、先端に近い所から、仕掛けを海中になじませて、先端部から合流部分を釣る方が効果的だと思います。

【使用例5】

磯に、かなり大きな切れ込みや、湾洞(ワンド)に、波やウネリが押し込んでくると、押し込まれた海水が出て行く流路が必ずできます。波やウネリの大きさと、押し込んでくる角度に対して、切れ込みやワンドの外形や海底形状により、どこに流路ができるかわかりませんが、海面を水平方向に出て行く流路と、縦方向に海中を通過して出ていく流路の両方があります。有効性が高いのは、縦方向です。ウキサイズは、前例に示した地方地域に適したもので、0～3番あるいは4～5番を使用します。波やウネリの入ってくる方向の反対側の磯際に近い部分に振り込みます。あるいは、波やウネリが入ってくる側の磯際に入れます。縦方向の流路に反応すると、水平方向に流れていたウキが、海中へと吸い込まれるように入っていくので、ハッキリと流れを

確認できます。ウキが海中深く入って行かないようでしたら、セットしてあるウキ番号より小さい数字にローテーションします。魚がどの水深にいるかわからないのですから、付エサを海底付近まで送り込んでタナを探らなければなりません。

海底方向に入り始めたウキの反応を止めるような、ラインの張りは禁物です。スプール内で、ラインがかみ合っていないか常にチェックして、ラインの送り出しを止めないように気配りをします。

リズムよく出ていたラインが止まってしまったら、穂先を軽くフリッピングして、微少の力でウキに刺激を与えます。微少な刺激にウキが反応して流れ始めれば釣りを続行して下さい。ウキが反応せずラインが出て行かない場合、ラインが海藻や海底に引っかかっている可能性がありますので、素早く回収して、振り込み直します。激流でも遅い流れでも、ウキが送り込まれる速さより、ラインを送り出す量の方が多くなる傾向がありますから、送り出し量を常に考えながら、ウキの反応や動きを止めないよう、また、余分な糸ふけを出さない注意をして下さい。

特にφ3番については、次のことをローテーションをするときの参考にして下さい。

海中に、小さい石と大きい石を同時に落とすと、大きい石の方が速く沈んでいきます。てんぐウキもφ44の0番とφ40の0番では、前者の方が、若干速く送り込まれていきます。φ40の0番とφ36の0番でも同じ関係です。

縦方向の流れに反応して、海中に送り込まれる速度が速い方が有利か、遅いほうが有効かという判断はむずかしい所です。ゆっくりと送り込まれて行けば、付エサが魚の視界に入る時間を長くとれるだけに有利なのですが、速く送り込まれても食ってくれば、送り込まれる速度が速いほうが効率が良いことは言うまでもありません。エサ取りやメジナの活性状態で左右されるので、その時の状況によって個々の判断で、ローテーションして下さい。

【使用例6】

前記で海中の流れは、それぞれに寿命を持っている、と説明しましたが、海面も海中もすべての流れが一斉にピタリと停止してしまうことはないようです。海面にも海中にも流れが無いとき、海底付近の横方向の流れを探して釣るのは、無駄ではありません。海底の横方向の流れを釣るには、付エサからウキまでを海底まで送り込まなければなりません。ところが、海面に流れが無かったり、あるいは、流れが弱すぎて、とてもウキを海底方向に送り込んでくれるだけの力(圧力)は持っていません。そこで、大きいウキサイズの0~2番をセットします。ウキサイズの何φと指定できないのは、海の状態を特定したくないからです。φ28の0~2番をセットしても、海中には入るが海底までは入っていかなければ、φ30の0~2番にローテーションするというように、次々と大きいウキサイズへとローテーションして下さい。ウキが、ゆっくりと、沈んでゆく番号を見つけ出します。まちがっても、石を落としたようにストーンと沈んでしまうウキでは、海底の流れに反応しません。

磯まわりの平均水深が8~10m位あれば、仕掛けの送り込みに5~6分間は待たなくてはなりません。海底の横方向の流れにウキが反応すると、ラインの出に変化があって、パラッ・・・パラッ・・・と、あるいはパラバ・・・と息づまる間があってから、パラバ・・・と出始めます。

海面の水平方向の流れのように、いつまでも流し続けられるという訳にはいかず、短い距離しか流せません。海底の横方向の流れに反応していたウキが止まってしまったら、穂先のフリッピングで、ウキに微少の刺激を与えます。糸ふけが多すぎるとフリッピング効果は期待できませんから、ラインを注意深く巻き取って、フリッピングをします。この微少な刺激にウキが反応して流れ出せば、まだ釣りは生きています。反応せずラインが出てゆかない時は仕掛けを回収して下さい。

海底の横方向の流れは、どこにあるか全くわからないので、振り込み場所を変えながら探して行きます。

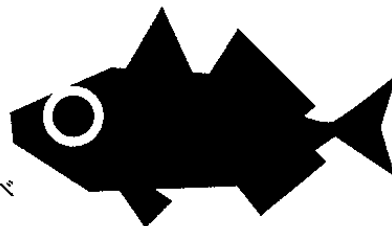
海底の流れは遅くて弱いものと決まてはいないので、遅い弱いという先入観を持たないで下さい。また、仕掛けの流し方を覚えるまではむずかしい釣り方ですが、一度コツをつかむと、結構ハマリやすい釣りになります。

【使用例7】

海面の水平方向の流れの底から分岐して、対流となる縦方向の流れも、眼では確認することができません。0~3番あるいは0~4番をセットして、水平方向の流れに仕掛けを振り込みます。ウキは海中へ送り込まれて行きながら流れ続け、仕掛けが縦方向の流れに入ると、ウキも反応して水平方向の流れから縦方向の流れへと移り、海底方向へと入っていきます。多量の糸ふけは、ラインに微少な抵抗力を発生させるので注意して下さい。また、ラインを張っていますと、ウキに海面方向へ浮上する力が働き、縦方向への入口にウキが入っても、そのまま通過してしまいます。水平方向の流れの中から、縦方向への入口を探すのですから、イメージとして、ウキがなだらかなスロープを、ゆっくりと滑り落ちて行くような状態で流していけるウキ番号を見つけて下さい。水平方向に何メートルあるいは何十メートルウキを流せば、縦方向の入口があるなどという法則はありません。あくまでも、水平方向の流れの中から、縦方向の流れの入口を探して釣りをします。

磯際釣り

波やウネリが磯に当たると、海面部分の海水はハネ返って行きますが、残りの海中部分の海水は、磯肌へ添って海底方向へと沈んで行きます。海中部分の磯をかべに例えれば、かべを這うように海底方向へと流れる、縦方向の流れとなります。



磯際から何メートル以内を、磯際釣りというのか。1メートルだ、いや1.5メートルだ、とか、色々と言われています。しかし、流れの中は釣れる確率が高い、このことを無視すれば、磯際はどの範囲でも正解なのでしょうが、流れの中、という限定があるのですから、波やウネリが磯に当たって、1メートルの厚さの海水がかべを這うように沈んでいるのでしょうか。ましてや1.5メートルの厚さで、どちらにしても物理的にあり得ない数字です。波やウネリの波高や波長にもよりますが、それでも、ごく薄い流れの厚みでしかありません。

磯際釣りは、縦方向にゆっくりと流れる、ごく薄い流れの厚さの中に、仕掛けを真っ直ぐに差し込んで、海底付近まで付エサを送り込んで行きます。φ24、φ28のφ~4番をセットして、磯際から20センチメートル以内、できる限り磯肌にギリギリに付エサから着水させ、付エサとハリの重みで沈めますが、その時にハリスにタルミが出るようでは、付エサの送り込み速度が速すぎます。ユックリと差し込んで、ウキを着水させます。仕掛けは海中に、ほぼ一直線状態でなじませてありますから、ウキが縦方向の流れに反応すると、海底へと送り込まれて行くのですが、ラインが海面に糸ふけをついていると、次の波やウネリが磯に当たってハネ返って行くときに、ラインも一緒に持ち出してしまいます。持ち出されたラインが抵抗力となって、反応しているウキを流れから引き離してしまい、磯際釣りは終わってしまいます。

磯際釣りで糸ふけを出すと、磯にラインが引っかかってしまい釣りになりません。釣りの中でラインオペレーションテクニックが最も強く要求されるのが、磯際釣りです。しかし、ごく薄い流れの中に、仕掛けが送り込めれば、かなり高い確率で釣りが成立する、絶好の縦方向の流れの代表です。

■ 4～6番

この番号が縦方向の流れに確実に反応するか、しないかは、流れが持っている力(圧力)にかかっています。流れの質で、大きく地方地域に分割すると、その地方地域内の特色がある磯までが平均化されてしまふ、と説明しましたが、まさに、平均化してはならない特色のある磯では4～6番は必要な番号です。

外洋の離島・外洋に点在する磯では、当然必要ですが、湾口付近や外洋に面した磯、湾奥から湾奥の磯、そして日本海側の磯で、速い流れが通る所では4～6番も海中に送り込まれますが、海底付近までは届きません。実際に送り込まれる水深についてはファジーで、わかりません。4～6番は水平方向の流れの底から分岐する縦方向の流れを釣ります。

■ 7～12番

ここまでの番号になりますと、外洋の離島や外洋に点在する磯で、かなり速い水平方向の流れの底から分岐する、縦方向の流れを釣るには必要です。その他の地方地域の磯では、7～12番を海中に送り込むまでの力を、流れが持っていないようです。ウキは水面ギリギリに浮いていますから、ウキ下を仮り決めてタナを探る釣り方となります。この場合、ウキ下を一定に保ちたいので、仁丹オモリをハリスに打って下さい。

海岸から海底の広い範囲が岩石で構成されている所を「磯」といいます。釣りでは陸岸を地磯といい、渡船する岩礁を磯と呼び分けています。

地磯は、海と海岸の境には大・中の岩石が並び、海岸際の海底から沖に向かって、岩石はだんだんと小さくなって行きます。海底の起伏は比較的なだらかですが、点在する大・中の岩石が、仕掛けの根がかりの原因になります。渡船する磯周辺の海底は、地磯の海底とは様子が違います。

岩礁が小山のように盛りあがっている所があり、平べったかったり、角ばっていたり、丸味があった大きな岩が、そこかしこにあり、大石がいくつも寄り集まっている所、ゴロ石で敷き詰められた部分もあります。岩床がスリバチ状に窪んでいる先が、ほとんど垂直に延びて海面近くまで高まった部分が沈み根になっています。磯も、海底の高まりが、海面を突き抜けて海上に出ている部分ですから、海底の一部です。広い海底を処せまじと岩礁や岩石が、高く低く、深く浅く埋めつくしていますから、磯まわりの水深が8～10mあっても、沈み根の上は2mくらい、小山のような岩礁部分は5m、大石の上の水深は6～7mというように、水深は、四方八方バラついている海底が、どこまでも連続しているという複雑さです。

こんな具合ですから、磯まわりの平均水深とウキ下を同じくらいにして、仕掛けを流せば、海底付近が釣れる。という考え方が正しくても、実際には、根掛りが激しくて釣りにはならないのです。それなら、根掛りしない所で、ウキ下を決めればいいたろう。と考えられるかも知れませんが、それでは、海底付近を釣るという目的が失われてしまいます。従って、水平方向の流れに、水面に浮くウキで、ウキ下を決め、流れに仕掛けを運ばせながら、常に海底付近を釣り続けるということは、ほとんど不可能です。

縦方向へのとまどい

初めて釣りを覚える人は、釣りそのものに戸惑いを感じても、縦方向の流れの釣りを苦にはしません。それが釣りだと思っているからです。ところが、水平方向の流れの釣りに慣れてしまった人には、縦方向の釣りに、とまどい、むずかしさを感じると思います。

ウキから視線をそらさない釣りが、そのウキが海中に入ってしまう不安。

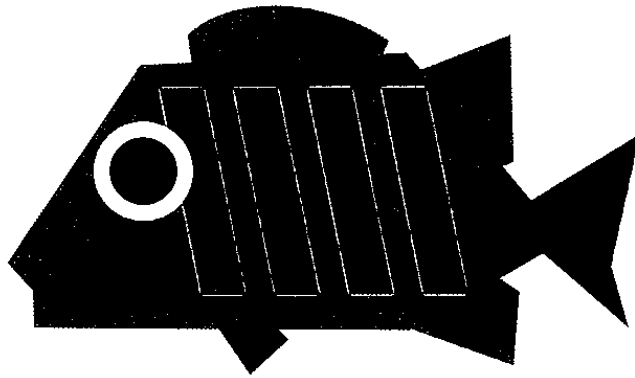
ウキは流し続けるのが習慣になっているのに、見にくい、見えない海中の、どこまでウキを送り込んだらいいのか、という困惑。

当たりの合図や、当たりの取り方がわからないという心配。

縦方向の釣り方をアドバイスしてもらえないという心細さ。

まわりは、ほとんど水平方向の釣りをしているのに、一人だけ縦方向の釣りをしているという違和感や、周囲の眼も気になるでしょうし、今更、カッコ悪い思いをしながら、釣りを覚えるのもうっとうしいかも知れません。

あれやこれやで、縦方向の釣りに集中できなくなったら、一時中断して下さい。そして、慣れている水平方向の釣りをしましょう。それで釣れれば良いことですし、慣れた釣り方でも、釣りにならなかったら、再び縦方向の釣り方に切り換えて下さい。そんなことを繰り返しているうちに、必ず縦方向の釣りが、理屈抜きで納得できる場面にぶつかります。自信がつくのは、そんな時で、貴重な経験になります。何度中断しても結構ですから、集中できるときに縦方向の釣りを覚えるようにして下さい。釣りに利用できる流れの範囲を広くすれば、釣りの楽しみ方に厚みがあります。



SEVEN ISLANDS

株式会社セブンアイランド

〒100-1211 東京都三宅島三宅村坪田1275番地
TEL 04994-6-0777 FAX04994-6-1130